

オール富良野でまちに活気を ルーバン・フラノへの道



富良野市のまちづくり計画

素晴らしい観光資源を有し、多くの観光客が訪れる富良野市ですが、中心市街地に観光客を呼び込む魅力的なコンテンツがなく、「まちなか」は閑散としている、という状況が続いていました。この状況を打開するため、富良野市は、平成22年に「富良野市中心市街地活性化基本計画」を策定。「都会の魅力と、田舎の魅力」を併せ持つ、ちょっとおしゃれな田舎町」を意味する快適空間「ルーバン・フラノ」の実現をめざし、まちづくりに取り組むことになりました。このまちづくりのメイン事業は、フラノマルシェ事業と東4条街区地区市街地再開発事業（通称「ネーブルタウン事業」）です。

フラノマルシェ事業では、まちなかの賑わい復活を目的に、平成22年に「フラノマルシェ」をオープン。フラノマルシェは、富良野らしい景観を備えた「にぎわい滞留拠点」とともに、富良野の食文化や加工食品を生かした「食文化の発信基地」とした集客施設であり、広場では、ファーマーズマーケットなどの季節感豊かなイベントを行っています。

また、フラノマルシェは、国道38号線沿いに立地しており、まちの玄関口としてのインフォメーション機能も持つっており、フラノマルシェを訪れた観光客を中心市街地に周遊させ、「まちなか」全体の賑わいを創出しています。

一方、ネーブルタウン事業では、「歩いて暮らせるまちづくり」をテーマとして、平成27年に複合施設「ネーブルタウン」が完成。ネーブルタウンには、商業施設である「フラノマルシェ2」や全天候型多目的交流空間であるアトリウム「TAMARIBA（タマリバ）」の他に、市立保育所、サードス付き高齢者向け住宅、内科クリニック、賃貸住宅などがあり、3世代交流可能な新たな生活街として機能しています。

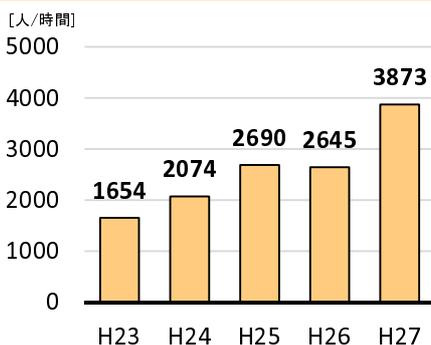
まちづくりの効果

フラノマルシェは、富良野市郊外を訪

北海道のほぼ中心に位置する富良野市。ドラマ「北の国から」のロケ地や「ラベンダー畑」が有名なこの市には、毎年多くの観光客が訪れていますが、中心市街地に観光客は訪れず、「まちなか」は衰退する一方でした。しかし、近年「民」を中心としたまちづくりにより、中心市街地が活性化され、全国から注目されています。編集部では、富良野市でのようなまちづくりが行われているのかを取材してきました。

取材者
地域戦略課 横浜、七戸、高田

市中心市街地歩行者数の推移



れる観光客を中心市街地に呼び込むことを目的の1つとしていましたが、効果は絶大でした。フラノマルシェの来場者数は、当初の見込みをはるかに超え、平成28年度は、フラノマルシェ2と合わせて、120万人に達しました。

また、中心市街地の観光客はフラノマルシェ開業後10倍以上に増加するとともに、1時間当たりの歩行者も年々増加し、平成27年度には対前年度比46%増となる3873人に達し、「まちなか」は人々で賑わうようになりました。

※「ルーバン」…「ルーラル(田舎)」と「アーバン(都会)」を合わせた造語で「都会の魅力と、田舎の魅力」を併せ持つ、ちょっとおしゃれな田舎町」の意味。



ふらのまちづくり株式会社
代表取締役社長 西本 伸顕 氏

富良野市のまちづくりで中心となった方々がいいます。ふらのまちづくり株式会社の西本代表取締役社長と湯浅専務取締役、そして元富良野市職員である商工会議所の大玉専務です。御三方は、平成14年から実施された富良野駅前再開発事業にも関わりましたが、思い描いたようなまちづくりにはならず、歯がゆい思いをしました。その後、自分たちで本格的にまちづくりをしていく必要があると感じ、フラノマルシェ事業などまちづくりに積極的に関わっていきました。

今回、そんな御三方のうち、西本代表取締役社長と湯浅専務の御二人にまちづくりに対する思いを伺ってきました。

中心人物に聴く



ふらのまちづくり株式会社
専務取締役 湯浅 篤 氏

富良野市には、元々観光客がきているのに、「まちなか」にはほとんど立ち寄ってもらえず、どここのまちとも変わらない状況でした。どんどん店もなくなってきたおり、空き地も増えていくという中で、このままでいいのかなという思いがずっとありました。振り返ると、富良野市はテレビドラマ「北の国から」頼りで、あまり「まちなか」は努力をしてこなかったように思います。そのような状況の富良野市を見ていると、やはり自分の会社さえ良ければという考えではなく、子どもたちに誇れるまちを残すことが私たちの使命だと感じました。

「まちづくりへのきっかけ」

また、富良野の食をしつかりと売り出せば、まちに人が入ってくるきっかけになるだけの魅力があると思っていました。そのため、当時、病院の移転で空き地となっていた市の一等地に食のテーマパークであるマルシェをつくることによって、中心市街地への集客に繋がると考え、まちづくりに取り組みました。

「滞留型拠点への思い」

マルシェをつくるにあたり、まち全体に波及効果があるものにしたという考えがありました。議論の中には道の駅という話もありましたが、道の駅では買い物をするだけの通過型になってしまい、まちの中に人が入ってきません。

また、公園のような、市民の人たちに愛される施設にしたかった。なぜなら、富良野の場合には、観光客だけをターゲットにしてしまうと、冬場は人が少なく、支えてもらえない。やはり地元の人に愛される施設にしないと年間の経営が非常に苦しくなります。

元々、富良野の「まちなか」には人々が憩える空間がありませんでした。それがつまらないまちにしているということもあり、とにかく観光客も地元市民も来る、賑わいのある滞留拠点にしたかった。その結果、めざしたのは、通過型の道の駅ではなく、滞留型の市民に愛される賑わいの拠点であるマルシェでした。

富良野市中心市街地活性化への歩み

- 平成14年 富良野駅前地区第一種市街地再開発事業開始(平成19年度に事業終了)
- 平成15年 ふらのまちづくり株式会社設立
- 平成19年 フラノマルシェ事業開始(平成21年に事業完了)
- 平成20年 富良野市中心市街地活性化基本計画(第1期)を策定
内閣府総理大臣から認可を受ける
- 平成21年 ネーブルタウン事業開始(平成26年度に事業完了)
- 平成22年 4月にフラノマルシェオープン
当初年間目標30万人を大きく上回り、来場者数55万人を突破
- 平成26年 富良野市中心市街地活性化基本計画(第2期)を策定
- 平成27年 3月にふらのまちづくり株式会社が「がんばる商店街30選」に選ばれ、経済産業大臣表彰を受ける
6月にネーブルタウンオープン
フラノマルシェ・フラノマルシェ2の年間来場者数が100万人を突破
- 平成28年 6月にふらのまちづくり株式会社が第5回まちづくり法人国土交通大臣表彰【まちの活性化・魅力創出部門】国土交通大臣賞を受賞

📌 周りからの反応

最初は、反対されました。本当に観光客が「まちなか」にたくさんやってくるのかという声や、逆に人が来たとしても、マルシェに人が吸い上げられて、「まちなか」に人が流れなくなってしまつたのではないかという意見がありました。そのため、スタート時点での賛同者は本当に少なかったと思います。

そこで、自分たちは、利益を求めているのではなく、まち全体が元気になるためにポテンシャルを生かした交流施設が必要なんだということを説いて回りました。例えば、飲食では、マルシェの中にレストランや食堂をつくるのではなく、テイクアウトに留めて、まち全体に人が流れるようにする。むしろ、インフォメーションコーナーをつくって、訪れた人がまちに入っていくように案内する場所にするからと約束したりしました。

すると、徐々に私達のめざすことが理解されるようになり、マルシェをつくり始める頃には、半分ぐらいの方が賛同してくれるようになりました。

📌 責任世代を中心とした 官民協働こそが必要

私達は、50代、60代を責任世代という言い方をしていますが、私達くらい世代が次の世代にいいまちを残していく



▲人々で賑わうフラノマルシェの様子

責任があると思います。若い人たちは自分の店を切り盛りするだけで大変ですので、まちのトップリーダーたちが、まちのことを思って、本気で動かないとまちづくりは上手くいきません。また、もし若い人にやらせるとしても、責任世代が責任を取る覚悟を持たないといけません。

一人のカリスマによる夢物語を期待している人がいるけれども、一人では何もできません。本気でまちの知恵を集めて、「いいまちづくりをするぞ」という思いがないと絶対に成功しないと思います。

また、行政と民間とのコラボレーションはすごく大事です。行政的な事務手続きや補助金申請などは、専門家である行政の方がいいとできません。一方で、「金を稼ぐ」ということについては、民

間が得意としているので、任せていたきたい。官民の壁を取っ払い、一体となつてやっていく必要があると思います。



▲全天候型多目的交流空間アトリウム「TAMARIBA(タマリーバ)」

📌 まちづくりについて

まちの中にいかに投資していくかが大切です。どうしても土地の安い郊外に施設を建ててしまうところがあるようすが、いかに中心市街地を集めて、まちが壊れないようにするかが大事です。

また、中心市街地の活性化を商店街の活性化と捉える方がいますが、実際の中心市街地はそうではなく、生活インフラの中心のことなんです。昔のまちは雑然としていたけれども、歩いて暮らせるファクターがまちの中に全部あったから便利だった。しかし、今それが郊外型になり、車がないと暮らせないまちになつ

てしまった。「生活街」ということをもう一度考えると、歩いて行ける範囲で用が足せるようにまちづくりを図るべきだと思います。

📌 若手の育成

私達は、市や商工会議所、まちづくり会社等を中心メンバーとした「中活運営委員会」を毎週開催し、まちづくりについて議論を重ねています。また、その会議に、富良野のまちを将来背負っていく、公平に議論できる若手の方に声をかけて、参加してもらつたなど、若手の意見も積極的に取り入れるようにしています。



▲毎週行っている「中活運営委員会」の会議の様子



(株)サンエービルド工業 大北土建工業株式会社
代表取締役社長 取締役社長室長
浅田 康詞 氏(左) 荒木 崇宏 氏(右)

中活運営委員会の

若手に聴く

西本社長と湯浅専務の印象

〔浅田氏〕西本社長、湯浅専務、さらに商工会議所の大玉専務（元市職員）の3名が中心となり、周りを引っ張っている印象です。そして、何よりもまちづくりに対して熱い。いくら素晴らしいまちづくりの企画を立てても、言ってるだけでは誰も共感してくれません。まちづくりへの熱さと行動力があつたから、反対していた人も納得して、協力してくれるようになったのだと思います。

富良野の魅力について

〔浅田氏〕今の会社を引き継ぐ前は、富良野市外にいました。その後、富良野市に戻つてみると、改めて富良野の野菜は美味しいと思うとともに、景色の綺麗さを実感しました。

〔荒木氏〕私も札幌や鹿児島、東京などでの体験を経て富良野に戻ってきました。様々な土地を見て感じた北海道の魅力は、自然をはじめとした見所が多い点です。他の土地では名所ばかり注目されてしまふが、北海道はそうではありません。

富良野への思い

〔浅田氏〕富良野市は、生活や子育ての面でも住みやすいまちですが、旭川や札幌などの都会に人が流れてしまっているのももったいない。それを防ぐために、田舎の中でも利便性があるまちになればいいなと思っています。過度に都会になる必要はなく、自然と都市が融合したようなバランスのいいまちになってくれたらと思います。

〔荒木氏〕私は、経済的にはなく、自由があつて、精神的に幸せで楽しく暮らせるまちになってくれることが一番かなと思っています。「あんな田舎きらい」「絶対戻りたくない」と思われるようなまちにしたい。市外に住んでいても実家に帰ってきたときに、楽しいと思ってくれるようなまちになってくれたらと思います。

富良野流「官」としてのまちづくり

いつ頃から関わっていたのか

〔黒崎氏〕中心市街地活性化という面では、富良野駅前開発からはじまり、平成13年からずっと市街地整備に携わってきました。当初は、市施行の土地区画整理事業全般に関わっており、現在は「官」の役割分担として、中心市街地活性化基本計画をはじめ、国との協議など市が担ふべき中心市街地活性化に関する様々な部分を業務としています。

民間との関わりを通じて

〔吉田氏〕駅前開発の段階で、行政がやることへの限界を感じていました。やはり自治体の職員も民間のノウハウを学ぶ必要があります。ただし、学んだものを鵜呑みにするのではなく、それを噛み砕き、消化して栄養とする必要があります。私も富良野のまちづくりを通して、西本社長や湯浅専務から多くのことを学び、影響を受けました。ある日まちづくりの専門家である「タウンマネージャー」とまちづくりについてお話しした際に、「役



富良野市建設水道部長
兼経済部中心街整備推進課主幹
吉田 育夫 氏

所の職員から経済性や経済効果の話も聞きました。御二人にお会いしなかつたら、普通の公務員のままだったと思います。

〔黒崎氏〕富良野市中心市街地活性化基本計画では、まちづくり会社を公益的デベロッパーとして位置づけています。そのため、富良野市では行政が主役となって活性化に取り組むのではなく、官民一体となり、民の部分はまちづくり会社が中心となって事業推進を図っています。

〔吉田氏〕民間でできること、行政でできることをお互いに認識して、協働でやっていきます。以前のまちづくりは行政からの一方通行の面が大きかったと思いますが、この活性化事業では、富良野をよりよくするという目標は一致していますので、官民それぞれが得意な分野でのノウハウや方法論についてお互いに意見やアイデアを出し合うスタンスです。



富良野市経済部
中心街整備推進課長
黒崎 幸裕 氏